悲しき探偵に微笑みを

東雲ゆき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
悲しき探偵に微笑みを

【Ｎコード】
Ｎ８１１０Ｚ

【作者名】
東雲ゆき

【あらすじ】
何でも始めから他人よりこなしてしまう社交的で明るい沢緑　律子、勘が鋭く圧倒的なスピードで真相に辿り着いてしまう大人しくもの静かな椎葉　夏澄。この二人が巻き込まれる、日常にちりばめられた些細でありながら不思議な事件たち。そして、すべての謎を解き明かす少女、夏澄自身が秘めた謎とは・・・？ライト・ミステリ。

1

物語は『はい、始まるよ』とは始まってくれない。
気がつけば、すでにスタートのホイッスルが鳴っている。
そういうものなのだ。
沢緑（さわみどり）　律子（りつこ）の場合も、物語は”あの子”と出会ったときから始まったのか、はたまた”あの子”に出会う前から始まっていたのか、今となっては定かではない。

＊＊＊

私は、勉学も運動も何をやっても最初から人並み以上にできた。
それを自慢に思ったりすることは決してなかったけれど、何をしても退屈だった。
中学校にあがったら、何か私を唸らせるようなことに巡り会えるかもしれないと淡い期待を抱いていたが、何も変わらなかった。
けれど幸福というものは、首を長くして辛抱強く待っていれば訪れるものだ。

私の場合もまた然り。

何事もなく中学を卒業し、私は高校に入学した。
名門校というわけではないが、そこそこの進学率を誇っている高校。

そこで私は、ある女の子と出会った。

不思議な女の子だ。

いや、不思議だと思ったのはきっと私だけだろうと思う。

そしてふり返ってみると、そんな彼女といるとろくな目にあっていない。

それが私の求めた、面白いことなのかは今となってはもう分からないけれど。

それでもその女の子、椎葉（しいば）　夏澄（かすみ）との出会いが私を大きく変えた。

彼女と出会えて、良かった。

それは変わらない。

1　（カステラはどこ？）

高校一年、五月。

私は第一志望であった東園高校に見事合格し、しかも成績最優秀者として入学式に壇上に上がり新入生代表の挨拶までこなしてしまった。

新しい校舎も大分見慣れてきて、クラスメートの顔と名前も完璧に覚えた。

順調な滑り出しだろう。

そして入学式から一か月も経てば、女子なら仲の良い友達の一人くらいできる。

私は教室に入り、自分の机に鞄を置くと隣に座っている彼女に声をかけた。

「おはよう、夏澄」

彼女はそこでやっと、視線を私に向ける。

「おはようございます、律子さん」

にこりと微笑む彼女。

彼女は私を沢緑さんでも律子ちゃんでもなく、律子さんと呼ぶ。

友達にそう呼ばれているのは初めてだ。

私は改めて、彼女を眺める。

アーモンド型の大きな瞳に、程よい高さの鼻とキュッと結ばれた唇がその小さな顔にバランス良くおさまっていて、セミロングの髪は毛先がゆるくウェーブしている。

東園高校は校則が特別厳しいというわけではないけれど、パーマは禁止されているからきっと生まれつきなんだろう。

東園高校の制服であるセーラー服の上から灰色のカーディガンを羽織っていて、どこか儚げな美人といった容貌。

椎葉（しいば）　夏澄（かすみ）は入学初日から、といったら当たり前かもしれないが、どこかミステリアスな雰囲気を漂わせている子だ。

私は、鞄から一冊の文庫本を取り出した。

「そういえば、頼まれてた小説持ってきたよ」

夏澄は笑みを浮かべる。

「本当ですか！楽しみにしてたんです」
「読み終わったら、また何か教えてくれれば貸すから。遠慮なく言って」
「お気遣いありがとうございます。読み終わったら、考えてみますね。本当に、ありがとうございます」
「お礼なんて良いってば。夏澄が喜んでくれるだけで十分嬉しいよ」

私の席は、一番後ろの窓側から二列目。

そして隣、一番後ろの一番窓側に座っているのは、椎葉（しいば）　夏澄（かすみ）である。

夏澄は誰が見てもクラスきっての美人だが、その顔立ちに反してどことなく地味な雰囲気でクラスでも空気のような存在だった。

私も始めは、それに疑問を抱いていて夏澄に近寄ったのだが話してみると夏澄は気さくで特別暗いというわけでもなく、私は夏澄と頻繁に話すようになったのだ。

私が夏澄に文庫本を手渡したときちょうど、担任教師が教室に入ってきた。

私は席に戻り、一時間目の授業が始まった。

＊＊＊

放課後、私は一人で教室を出て廊下を歩く。

私の所属する１年Ｂ組の教室は、東棟四階にある。

そこから私が向かうは、部室棟。

東高の部室棟は、北棟まで行ってそこから渡り廊下を通って行かなければならない。

つまり、東棟からはかなり遠い。

たっぷり十分かけて部室棟まで行き、部室棟の二階まで上ると、一番奥にひっそりと存在する部室のドアを開けた。

ドアを開けると、古びた木の香り。

律子は部室のなかに入り、ドアを閉める。

この香りにも慣れたものだ。

見ると、部室にはすでに私のほかに二人がいた。

「すみません。来るの遅かったですか？」

私は鞄を机に置きながら言う。

「ううん、大丈夫よ。まだ諏訪くんも藤木くんも来ていないもの」

椅子に座っていた柊先輩が言う。

少し茶色がかった髪が腰までのびていて、全体的に華やかな雰囲気だ。しかし、おっとりとした性格で天然という言葉がぴったり合う。柊先輩は大病院の院長の娘で、校内のなかでも一番のお嬢さまらしい。

確かに、柊先輩はいかにも良い所のお嬢さまという雰囲気だ。

柊先輩は笑みを浮かべる。

「私もさっき来たばかり。唯花ちゃんのほうが早く来てたのよ」

私は唯花に目を向ける。

唯花は私と同じ一年生。

しかし、律子は1年B組だが唯花は1年E組とクラスが違う。

ちなみに絵美は、2年A組で一学年年上である。

唯花は髪を耳の横でくくっていて、活発な印象がある子だ。

「早く来たって言っても、二分くらいですよー」

唯花がそう言ったとき、ドアが勢いよく開かれた。

入ってきたのは、二人の男子生徒。

「おー今日は集まりがいいねえ」

一方の男子生徒、諏訪先輩が言う。

諏訪先輩は文化委員の副委員長も努めていて、社交的で明るい。

そしてもう一人の男子生徒、藤木先輩は無口で寡黙な人だ。

二人は仲が良い。

正反対だからこそ、仲良くなったのかもしれない。

諏訪先輩と藤木先輩が鞄を机に置くと、柊先輩が口を開いた。

「そういえば律子ちゃん。夏澄ちゃんは今日は来ないの？」

「あ、夏澄は掃除当番だから遅れてきます」

「そうなの。来てくれたら楽しいし、良かった」

柊先輩は嬉しそうに微笑んだ。

＊＊＊

『読書愛好会』は、私が所属する部である。

部長は柊（ひいらぎ）　絵美（えみ）。副部長は諏訪（すわ）　柚矢（ゆうや）。

あとは、藤木（ふじき）　春馬（はるま）、篠塚（しのづか）　唯花（ゆいか）、沢緑　律子の計五名。

東高の部活動存続条件や部活動設立条件は部員数五名以上となっているので、なんとか足りるというくらいの人数だ。

ちなみに柊先輩・諏訪先輩・藤木先輩は二年生で唯花と私は一年生と、読書愛好会には三年生部員がいない。

活動内容といえば、月一度に図書局員により発行される”図書室通信”におすすめの本の紹介文や感想文を載せたり、あとはたまに図書室で図書局員の手伝いをするくらいだ。

読書愛好会だからといって、部員そろって読書するわけではない。

私はこの読書愛好会に、四月下旬くらいから所属している。

ちなみに、夏澄は私の友達ということで読書愛好会には部員たちと同じくらい訪れる。

だから夏澄も、籍は置いていないが半分は読書愛好会部員のようなものだ。

2　（カステラはどこ？）

「柊先輩、さっきしてた話、みんなにも話してみましょうよ」
突然、唯花が言い出す。
さっきとは、私が来る前くらいの話だろうか。
「ああ、そうかも。でも、大した話じゃないのよ」
「大した話じゃなくないですってば！もう、柊先輩は少しおっとりしすぎです！」
「何々？そこまで言われると聞きたいんだけどなー」
諏訪先輩も入る。
すると、柊先輩がいつもののんびりとした調子で話し始めた。
「うーんと最近ね、私の家のポストにゴミが詰まっていたりとかそんな感じのことがよくあるの。それだけ」
「それだけ、じゃないですよ！ポストにゴミが詰まっていたりとか、お前のやってる病院なんて潰れればいいとかひどい内容の手紙が送られてくるんですよね？それって立派な嫌がらせじゃないですか」
柊先輩の家は大病院だから、きっとそれに嫉妬した人による犯行だろう。
諏訪先輩が言う。
「警察に届けるべきだと思うよ。でも随分古典的な嫌がらせだねえ。

対策とかしたの？」
「今日、お母さんが警察に届けるって言ってたの。多分もう大丈夫よ。あ、そうそう」
柊先輩は手をぽんと叩き、鞄から長方形の平たい箱を取り出した。
「これ、知り合いの方からもらったお菓子なんだけどみんなで食べない？」
そう言って箱のふたを取ると、そこには小包装されたお菓子が二十個あまり綺麗に並べられていた。
「カステラですね」
「そうなの。律子ちゃん、カステラ嫌い？」
「いえ、大好きです。ありがとうございます、柊先輩。でも、こんなにみんなで食べちゃっていいんですか？」
「うん、お父さんの関係でうちにたくさんお菓子とかワインとか届くからいつも食べきるのが大変なの。だから逆にみんなに食べてもらえたほうが大助かり」
確かに、柊先輩の家にはお菓子とかがたくさん届いていそうなイメージがある。
なんとなくだけれど。
「じゃあ、ありがたくいただきます」
ちょうどそのときだった。
「絵美、いる？」

部室のドアががらっと開く。
見ると、一人の女子生徒が立っていた。
顔に覚えはない。
「あ、由紀乃。どうしたの？」
柊先輩がそう言って立ち上がり、ドアまで歩いて行く。
「部活中にごめん。明日のことなんだけど――」
なるほど、柊先輩の友達か。
二人はなんことか言葉を交わすと、「ごめんなさい。少し席をはずすね」と断りをいれ、部室から二人で出て行った。

「…どうしよう、カステラ」
私は呟く。
何となく、持ってきてくれた柊先輩がいないのに食べるのは気が引ける。
それを汲み取ったのか、諏訪先輩がカステラが小包装された袋を一つつまみ取った。
「おれは実は今、とてもお腹がすいてる。春馬、食べていいと思う？」

諏訪先輩は、部室に来てからずっと黙り大人しく椅子に座っていた藤木先輩に尋ねる。

「…とめないよ」

藤木先輩は表情の出ない顔で告げた。

ちょうどそのとき。

『今校内に残っている文化委員。全員、第三選択教室に集まれ。繰り返す、文化委員は全員第三選択教室に集まれ』

校内スピーカーから、放送がかかる。

文化委員の緊急集会といったところかな。

そして私と唯花と藤木先輩は、自然と視線を諏訪先輩に向けた。諏訪先輩が文化委員の副委員長なのは、みんな知っている。

「…面倒くさいけど、一応行っておこうかな」

そう言うと諏訪先輩は手に持っていたカステラの袋を開ける。そしてカステラを口に放りこみ、思い出したように言った。

「カステラ、食べないで置いといてくれるかい？」

「はい、待ってます」

そうして、諏訪先輩は部室から出て行った。

静まり返る教室。

なんとなく気まずい。

唯花とは同じ学年というのもあって、一緒に下校したりもするくらいの仲だけど藤木先輩とはまったく話したことがない。

いつもは諏訪先輩や柊先輩を通して、藤木先輩と話しているようなものだ。

藤木先輩一人を差し置いて、唯花と二人でおしゃべりというわけにもいかないし。

その気持ちは唯花も同じようで、私と同じように黙っていた。

沈黙のなか、藤木先輩がおもむろに自分の鞄に手を伸ばし、何やら探している。

少しの間、藤木先輩はずっと鞄のなかをあさっていたがやがてそれを止めると。

「……すみません、教室に忘れ物取ってきます」

そう言って教室から出て行った。

「あ！！」

その瞬間、唯花がばっと立ち上がった。

そして自分の鞄から慌てた様子で一枚のプリントを取り出す。

「どうしたの？」

「藤木先輩が鞄をあさっているので思い出したんだけど、あたし、出さなきゃいけない課題があったんだった！ごめん、ちょっと出してくるね！」

言い終えると、唯花は教室を飛び出す。

部室に残ったのは、私一人。

珍しいこともあるものだ。

することもないし…。

「…トイレ行こうかな」

私も席をたち、散歩がてらトイレに行くために部室を出た――。

3　（カステラはどこ？）

「…すみません、私が部室を空けたばっかりに…」

私はうなだれる。

すかさず、柊先輩が私の背中を優しく撫でてくれた。

「ううん、律子ちゃんのせいじゃないわ。気にしないで」

部室が暗い雰囲気に包まれたとき、部室のドアが音をたて開いた。

「遅くなってごめんなさい」

私はばっと顔を上げる。

「…夏澄！！」

ああ、良かった。

夏澄がいれば、どうにかなるかもしれない。

一縷の望みと言ったら大袈裟と言われるかもしれないが、私にとってはまさにそれだ。

「…何かあったんですか？」

夏澄はいつものように笑みを浮かべ、鞄を机の上に置く。

「…あのね」

私は、告げる。

「カステラが…なくなったの」

＊＊＊

ことは、私がトイレで部室を出て帰ってきたらすでに起こっていた。

私が部室を出る前は確かに机の上に置いてあった個包装されたカステラが、箱ごと綺麗さっぱり無くなっていたのだ。

部室のどこを探しても、見つからなかった。

「盗まれたとしか考えられない。夏澄、誰が盗んだか分かる…？」

今までの経験から夏澄に助けを求める。

至極当然の流れだろうか。

すると夏澄は、柔らかい笑みを崩さずに言う。

「この情報で犯人を特定することは難しいです。そうですね、今日読書愛好会の皆さんが部室に来てからそのカステラが盗まれるまで何をしていたか、これを教えてくだされば推論をたてることができるかもしれません」

すると唯花が、

「夏澄ちゃん、ひょっとして犯人はこの中にいる…とか言わないよね？まあ、犯人とか言うのは少し大袈裟かもしれないけど、あたしたちの行動はカステラが盗まれたのには関係あるってこと？」

と疑問を投げかけた。
そう思う気持ちも分かる。

「ごめんなさい、皆さんを疑っているわけではないんです。ただ、情報が増えるに越したことはないと思いませんか」

それはそうだ。
もっともな意見だろう。

私は口を開く。

「うーんと、私が部室に入ってきたときにはもう柊先輩と唯花がいて…あ、柊先輩の家になんか変な手紙が届いたりとかの嫌がらせについて話してたんだっけ？」

すかさず、唯花が頷く。

「うん。変な手紙やゴミが家の郵便受けに入ってたりね。それで一番に部室に着いたのはあたしで、その二分後くらいかな？柊先輩が来たんだよ。そのあと、五分後くらいに律子が来るまでずっと柊先輩の家の話してたよ。ですよね？柊先輩」
「そうね、そうだったわ」
「じゃあそのあと私が部室に来て、次はすぐに諏訪先輩と藤木先輩が入ってきた。諏訪先輩と藤木先輩、そのあと何しましたっけ」

「おれと藤木が部室に来てすぐに柊がカステラを机の上に出してたと思うよ。だよね、藤木」
「…そうだった気がする」

そこで、会話が一段落し沈黙が流れる。

私がふっとため息をついた。

「ここからが、どうだったっけ」

すると、諏訪先輩が話し始める。

「まずは、柊が友達に呼ばれて部室から出たね。あれ結局どれくらいかかったんだい？」
「うーん…十五分くらいかかっちゃったかな」
「で、そのあとおれが文化委員の緊急集会の放送がかかって部室を出たね。そのあとはよく知らないや」
「次は藤木先輩が部室を出て…。確か忘れ物があるって言ってましたよね」
「へえ、何忘れたの？藤木」
「…文庫本。教室の自分の机のなかに忘れてきて取ってきた」
「そのあとは私が、藤木先輩が鞄のなかを何か探している動作を見て、そういえば鞄のなかに今日提出のプリントが入ったまんまだ！ってことを思い出して部室を出て…。職員室で生物の高岸先生に急いで出してきた」
「…それで、部室に残ったのは私一人になっちゃって。何となく散歩がてらトイレに行った。で、その帰りにちょうど唯花に会って…」
「そうそう。そのまま一緒に部室に戻ったらなかったんだよね、カステラが」

「そのあとすぐ、諏訪先輩が戻ってきて次に柊先輩、その次に藤木先輩も部室に戻ってきた…。…こんな感じかな」

全員が、夏澄に視線を向ける。

すると夏澄が確認するように言った。

「では、柊先輩、諏訪先輩、藤木先輩、唯花さん、律子さんの順に部室から出たんですね。律子さんは何分くらい部室から出ていたんですか？」

「ほんの五分くらいだったと思うけど」

「五分もあれば、無人の部室に入りカステラを持ち去ることも可能ですね」

夏澄が微笑む。

「でも、カステラは誰も食べられなかったんですね。持ち去ってしまった方は今頃おいしく召し上がっているんでしょうに」

その言葉を、諏訪先輩が否定する。

「ううん、おれはしっかり一個食べたよ。これはおしいね。おいしかったのに残念だよ」

諏訪先輩は肩をすくめた。

私は柊先輩に体を向ける。

「柊先輩、なんだかすみません。私が部室を無人にしなかったらせっかく持ってきていただいたカステラ、台無しにしないで済んだのに」

「ううん。気にしないで、律子ちゃん。うちにお菓子は腐るほどあるから、また持ってくるわ」

すると、唯花が一回咳払いをした。

「…夏澄ちゃん、カステラを盗んだ人は分かったの…？」

唯花が遠慮がちに尋ねると、場に沈黙が流れる。

少ししてから、夏澄は口を開いた。

「…仮説でしかありませんがお話しした方がいいでしょうか」

全員が即座に頷く。

今までも夏澄はすぐに真相にたどり着いた。

その答えは、すべて的を射ているもので何回も感嘆させられた。

期待できる。

それに、せっかく柊先輩が持ってきてくれたものを無駄にしたくない。

「話して、夏澄」

私がせかすと、夏澄は「では…」と言って話し始めた。

「この問題は、先入観をなくせばすぐに分かります。まず、カステラを”盗まれた”という認識が大きな勘違いだったんです」

”盗まれた”が勘違い…？

「どういうこと？」

私は尋ねる。

「なんと言えばいいんでしょうか。皆さんの証言…といいますか、証言には不審な点は一つもありませんでした。そうなると、カステラを持ち去ったのは読書愛好会部員以外の部外者の犯行です。そこまで考えれば、もう持ち去った人物は一人に絞れてしまうんですよ」

部外者で、カステラを持ち去れた人物。

すると、諏訪先輩が口を開いた。

「疑いたくはないけど、他の部活の部員とか？」

夏澄が首を二回横にふる。

「幸いといいますか、それはあり得ません。律子さんが部室から出て帰ってくる間の五分間で忍び込むには、部室を見張って律子さんが出た瞬間に部室に入りカステラを持ち去る以外、方法はありません。そもそも、他の部活の部員さんたちは読書愛好会部室にカステラがあること自体知る由もないことです」

じゃあ…。

「誰が盗んだの？」

私が言うと、夏澄は柔らかい笑みを浮かべた。

「カステラが盗まれたと言い出してしまったことが先入観を生み出し、真相から遠ざけてしまったんです。カステラは盗まれたのではありません。そうですね、”没収された”というのが一番良い表現方法かと」

没収された…。

「あ」

思わず声を漏らす。

「先生が…没収した？」

夏澄は頷いた。

「カステラは先生によって没収されたというのが一番可能性が高い推論です。この学校の生徒が除外されれば、残るのは先生方だけです。きっと空の教室にカステラの箱をたまたま見つけて、没収したんでしょう。先生としては当然の行為です」

なるほど、ね…。

「先生に没収されたのなら仕方がありません。また、機会があれば持ってくるね」

柊先輩が笑顔で言う。

申し訳ない。

「柊先輩、本当にすみません。私のせいで、没収されちゃって…」

「律子ちゃん。お菓子なんて家にたくさんあるから。それに律子ちゃんは全然悪くないのよ？本当に気にしないで、ね」

そのとき、ちょうどチャイムが鳴った。

五時半。

もうこんな時間になったのか。

「…じゃあ、もう帰るか。今日の部活はこれにて終了！また明日」

諏訪先輩が明るい声で告げる。

それを合図に、全員が各々の鞄を持ち、部室から出る。

「じゃあ、職員室に部室の鍵を預けてくるので先に帰っててね」

柊先輩はそう言うと、職員室に向かって歩き出した。

私は夏澄の横に立ち、言う。

「夏澄、一緒に帰ろ」

夏澄は笑顔で答えた。

「はい、勿論です」

そのまま、五人は玄関へと静かに歩みを進めていく。

…まだ、解決してない。

カステラを盗んだのは、本当は誰？

4　（カステラはどこ？）

玄関前で唯花たちと別れ、今は夏澄と二人で帰路についていた。

カステラがなくなった。

その謎を夏澄はさっき見事解決してみせた。

けれど、何かが違う。

夏澄の推理にはおかしいところがある気がする。

「…ねえ、夏澄」

「何ですか？」

夏澄は答える。

…言ってみて損はないだろう。

「あのさ、さっきのカステラがなくなったことについてなんだけど…」

「はい」

頭のなかで言うことを整理する。

私はできるだけ、素っ気なく話し始める。

「もしカステラを先生が没収したんだとしたら、なんで私たちは説教されなかったんだろう。カステラだけ没収して、あとは放っておくって先生なかなかいないと思う」

夏澄は黙ったままだ。

私は続ける。

「普通に考えたら、カステラを見つけたら、没収するより先になんでこんなもの学校に持ってきたんだって指導を施すはず。その場に生徒がいなくても、あそこは読書愛好会の部室って先生なら分かるんだから、放送で職員室に呼び出しとかすると思う。それか、優しい先生なら見つけてもまあいいかって部室を通り過ぎるはず。その二通りだと思う」

疑問を口に出してみると、だんだんその証拠が見えてくる。

私は今さっき気付いたことをさらに補足する。

「それにね、夏澄。これは誰も気がつかなかったのが不思議なくらいなんだけど、知っての通り、読書愛好会の部室は部室棟二階の一番奥。一番奥の教室って、覗こうと思わない限り、見ることはない。だから先生が部室を覗く可能性がまったくない、とは言えないけど可能性はほぼゼロに近いんじゃないかと思ったんだけど…」

そこまで言うと、夏澄の足がぴたりと止まった。

そして私に顔を向ける。

私はきっと、夏澄は困惑した表情をしているとばかり思っていた。

しかし実際は違った。

夏澄は、私をしっかりと見て――微笑んだのだ。

まるで、私が推理の間違いを指摘することを始めから知っていたとでも言うように。

けれどなんとなく、悲しげなようにも見えた。

どういうこと…？

その反応に逆にこっちが困惑する。

すると夏澄は視線を私からずらす。

「…そこのベンチで、飲み物でも飲みながら話しませんか」

夏澄の視線のさきを見ると、自動販売機とベンチがあった。

五月。

そろそろ六時になろうとしている時間とはいえ、まだ少し陽が沈んでいる程度。

空はまだまだ明るい。

私が頷くと、夏澄はココアを書い、私は紅茶を買ってベンチに腰を

おろした。

「律子さんなら、必ず気がつくと思っていました」

なんの前置きなしに、夏澄が告げた。

私は、夏澄の端麗な横顔を見る。

「律子さんは、勘が鋭くて相手の意見を客観的に見ることが上手な方です。律子さんなら、あんなまやかしの推理に気がついてくれるのではないかと思っていました」

夏澄はいつもの微笑。

「律子さんには本当のことを話します。どこから話しましょうか」

「…始めから」

「そうですね。やはり、それが一番良いです」

夏澄が一口、手に持っていたココアを飲んだ。

私も思い出したように、紅茶を一口飲む。

「…まず、律子さんの言うとおりです。先生が没収したという可能性はゼロではありませんが、今回はきっと違うとわたしも思いました。もっとカステラを持ち去った人物として有力な方が、読書愛好会部員のなかに一人だけいらっしゃるからです」

部員のなか…？

柊先輩、諏訪先輩、藤木先輩、唯花。

このなかに？

「偶然が重なるに重なって、カステラは持ち去られたんです。部室が無人にならなければ、犯人はもっと別の自然な方法でカステラを持ち去ることができたかもしれないんです。けれど、結果的には犯人にとって部室が無人になったのは思ってもみない幸運だったんでしょうね」

夏澄の微笑は崩れない。

「まず、カステラを持ち去ることは部員全員に可能です。柊先輩は実は友達とのお話が早めに終わっていたかもしれないですし、諏訪先輩は委員の集会に行くふりをして行っていなかったかもしれないんです。藤木先輩と唯花さん、一応律子さんも、同様にして教室やトイレに行くふりをしただけということも考えられます」

なるほど、格好良い言い方をすると、全員にアリバイはないってことか。

私は紅茶を一口飲む。

「そうなってきますと、今回のカステラが持ち去られるという事態を起こしたのは、カステラを持ち去る動機がある方だけに絞られます。部員のなかでその動機があるのは、一人だけなんです。それは」

夏澄はそこで、言葉を呑んだ。

「どうしたの…？」

私が尋ねる。

すると、夏澄は遠慮がちに話し始めた。

「…ごめんなさい。言葉に出すのは少しはばかれます。せっかくの善意で行った行動を否定するようなことはしたくありません。犯人と呼ぶのも、とても申し訳ないです」

善意…？

カステラを持ち去ることが？

「実はあのまやかしの推理も半分ほどは正しいことを言いました。盗んだのではなく、持ち去ったというのもその一つです。そうですね、話を柊先輩の家は嫌がらせを受けている、というところに戻しましょう」

夏澄はふっと一息つき、話し始めた。

「嫌がらせの内容はお聞きした限りでは、郵便受けにゴミがいれられていたというものと、変な内容の手紙が届くというものでしたね。それと、今回持ち去られたカステラは、柊先輩の家から持ち込まれたというのを結びつけてみます」

まさか。

「カステラはその嫌がらせ犯から贈られてきたものだった…？」

私は思わず、言葉に出す。

「はい。柊先輩の家にはお家柄、お菓子やワインがしょっちゅう届けられると聞きましたし、もしその嫌がらせ犯が贈ったお菓子と知り合いの方から贈られてきたお菓子が混同してしまったとしても、

何ら不思議ではありません。重要なのは、嫌がらせ犯から贈られてきたカステラが普通のカステラだったのかということです」

なるほど。

私は言う。

「嫌がらせのために贈ったものなら、腐っていたり異物が混入していたりしたかも…」

最悪、毒が混入されていたかもしれないと考えると…。

その気持ちを汲み取ったのか、夏澄が否定する。

「毒が混入されていた、ということはありません。嫌がらせの手口からして、犯人は柊家に対して少し痛い目にでもあえばいいのにくらいの気持ちしか抱いていません。毒を混入するなんて、ハイリスクなことはしないと思いますよ」

そう言ってから夏澄は続けた。

「つまり、カステラを持ち去った方は、カステラが腐っていることに気がつき、部員の皆さんを守るためにカステラを内緒で持ち去ったというわけです」

カステラが腐っていたことに気がつくことができた人。

それは。

「もしかして…諏訪先輩…？」

夏澄は、相変わらずの微笑で頷いた。

問題のカステラを食べてしまったのは、諏訪先輩一人だけ。

諏訪先輩は文化委員集会に行く直前に、確かに個包装されたカステラを一つ、袋を丁寧に開け食べていた。

他の部員は、誰一人としてカステラを食べていない。

よって、カステラが腐っていることに気がついたのはカステラを食べた諏訪先輩だけだ。

…あれ？

「待って、夏澄。諏訪先輩は文化委員の集会があるって部室を出た。集会を無断で欠席したら、呼び出しがかかるんじゃない？集会を始めるので、早く来てくださいって、名指しで」

夏澄が答える。

「もしあのときが昼休みなら、そういった呼び出しがかかったかもしれません。でも、放課後ならその心配はありません」

「どうして？」
「放課後の急な呼び出しに応じられる生徒はどれくらいいるでしょう。普通は、すでに帰っていたりするのがほとんどなような気がします。だから、あの放課後の文化委員の緊急集会は先生方も、数人集まればいい方だと駄目もとで収集をかけたものだったんでしょう」
確かに、放課後なら委員の集会に来ていなくても不思議ではない。
あらかじめ、伝えてあったわけではなかったようだったし。
私はもう一つの疑問を告げる。
「じゃあ、もう一つだけ。諏訪先輩は、どうしてこのカステラは腐ってるってみんなに言わなかったの？わざわざ、一目を盗んでカステラを持ち去らなくても堂々と言えば良かったのに。諏訪先輩が悪いわけじゃないんだから」
すると夏澄は、視線を手に持っていたココアに落とし、静かに答える。
「それは、柊先輩に配慮してのことです。柊先輩は、お友達や後輩を人一倍大事にしている方です。そんな心優しい柊先輩が、同じ部活の部員たちに腐ったカステラを提供してしまったと知ったら。部長としての責任もありますから、読書愛好会を退部すると言いかねません。そんな事態を恐れ、諏訪先輩は柊先輩には絶対バレたくなかったんです。柊先輩が持ってきたカステラが、腐ってしまっていたことを」
よく考えると、そうだ。

柊先輩は普段はおっとりしているけれど、友達や後輩にもいつでも真剣に向き合ってくれる。

すると、夏澄は続ける。

「…諏訪先輩は、あれでなかなか頭の良い方です。能ある鷹は爪を隠す。諏訪先輩のそれはまさにでしょう。カステラが腐っていたことに気がついた諏訪先輩は、最善の対策をとりました。普通ならなかなかできないことです」

能ある鷹は爪を隠す。

諏訪先輩はノリが軽くて、いつでもお気楽なムードをつくっている。

私は今まで、諏訪先輩のそんな一面しか知らなかった。

今回の事件で、考えさせられる。

諏訪先輩はいつも、何を考えて行動しているんだろう。

「あのときとった諏訪先輩の行動はこうです。柊先輩が部室を出た直後、カステラを食べ、腐っていることに気がつきます。そのあと委員の収集がかかり、とりあえず部室を出て、隣の教室にでも身を隠し、部室の様子をうかがっていたんでしょう。すると藤木先輩、唯花さん、律子さんが上手い具合に部室が出て行ったんです。カステラをどう回収するべきか思考を巡らせていた諏訪先輩は、こんなチャンスはないと部室に忍び込み、カステラを持ち去ります。きっと、部室から誰も出る様子がなければ藤木先輩と唯花さんと律子さ

んにカステラが腐っていたことを伝え、回収したかもしれません。カステラを持ち去ったあとは、どこかに隠し、帰りにこっそり回収してどこかに捨てたのだと思います」

あれだけの情報で、ここまでたどり着けるなんて。

まったく、感嘆する。

…諏訪先輩が、みんなのためを思って隠した真相。

そこまでも推理し、わざと間違った推理をみんなに話した夏澄。

ふと、あの場面が脳裏をよぎる。

＊＊＊

『でも、カステラは誰も食べられなかったんですね。持ち去ってしまった方は今頃おいしく召し上がっているんでしょうに』

『ううん、おれはしっかり一個食べたよ。これはおしいね。おいしかったのに残念だよ』

＊＊＊

…今思えば、諏訪先輩は夏澄にこの問いをされた時点で夏澄はもう真相を分かっていると悟ったのだろう。

だからわざわざ、自分はカステラを一個食べたと宣言した。

私は手に持っていた紅茶を一気に飲み干すと、ベンチから立ち上がり、自動販売機の横にあったゴミ箱に紅茶の缶を捨てた。

そして私は、ぽつりと呟いた。

「…私は何も聞いてないし、知らない。ただ、なんとなく紅茶を飲みたい気分だったから座って飲んでただけ」

私は夏澄の方に体を向け、微笑む。

すると夏澄も同じように口元を緩め、残りのココアを一気に飲み干し、言った。

「わたしも、何も話していません。ただ、なんとなくココアが飲みたい気分だったので座って飲んでいただけです」

夏澄がそう言うと、私たちは静かに笑った。

そう、ときにはついていい嘘だってある。

いや、つかなければならない嘘だってあるんだ。

そして私はあのときなんとなくとはいえ、部室を出て行って良かったと心から思う。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8110z/

悲しき探偵に微笑みを

2011年12月26日00時50分発行